

星に願いを

○神代（かみしろ）島 岸壁（夜）

夏の音。風の音。波の音。海鳴り。木々がざわめく音。蟬の声。

空は満天の星空。大地は真つ暗な世界。遠くから、かすかにサイレンの音。

と、カタカタと小さな機械音。

ムナカタ ショウイチ（三六） 暗闇の大地に立ち、満天の星空を見つめている。

傍らにテント、そして衛星電話やらコンピュータ。

ムナカタ「満天の星。星降る丘。星の海。いつの時代も、またたく星は、ぼくらに夢を与えてくれる。それはいくら時が流れても、北極星のように変わりはない。遠き遠き祖先たちは、この星空に、何を夢見てたのだろう？まずは、星の『ひかりあれ！』太古の昔、人は星空に神を見た。時はめぐって星は、ぼくらに季節を教えてくれた。僕らが海へとこぎ出したとき、星は、ぼくらの友となり、ゆくてを照らす光になった。それから幾星霜（いくとしつき、がいかかな？）やっとぼくらがこの天上の、星の海へと漕ぎ出したとき、またも星は教えてくれた。この地球も、数多の星の一つだと。そしてぼくらは初めて知った。気の遠くなるほど広大な、宇宙の海の、ぼくらは、ほんの片隅に生きてることを。そしてぼくらは宇宙の中の、たった一人の地球人だったってことを」

ムナカタ、ふうと深く息をつき、ムナカタ「それでもぼくらは信じます。この大銀河の、星の海その奥に、あなたが暮

らしていることを。そしてもし、この声が聞こえるならば、海を隔てた、きょうだいや、どうか返事をして下さい。この星の輝きに誓って」

すると衛星電話のベルがなる。

ムナカタ「ちっ！はあゝ」

ムナカタ、衛星電話に出る。

ムナカタ「はい。こちらはXY地点。まったく異常ありません！え？はい？」

ムナカタ、すこし戸惑う。

ムナカタ「は、はい。すいません。『今のところは』異常ありません。引き続き、調査を！迅速に！丁寧に、粘り強く、は、はい、すいません。はい。調査、続けます」

ムナカタ、電話を切る。とフウツと大きなため息。

ムナカタ「ちえ。なにが国際機関だ。給料安いわ、こき使うわ。だいたい、こんな星降る大地に、異常があるわけないっしょ」

ムナカタ、大きく背伸びしながら、星空を見つめる。と流れ星。

ムナカタ「あ！流れ星！お願いです！宝くじ当たって、きれいさっぱり仕事辞めて、天体観測所を建てて、新星をはっけん…あゝあゝ間に合わず…」

ムナカタ、がっくりする。再度、星空を見上げ

ムナカタ「それにしても、今夜はやけに星が輝くなあ」

暗転

## ○ファルマウス船内 宇宙

まったくの無音。光り輝く船内。その光の中に一人、無機質な服装の男が一人、

ジェミニ。

ジェミニ、ハツとする。まるでムナカタの音が聞こえたように。

ジェミニ「う・み・を・へ・だ・て・た・きよ・お・だ・い？」

そこへルーイ(女)の声。

ルーイの声(小声で早口で)「バレノイカツイ ウシヨデウナカ？」

ジェミニ、ハツと驚き、声の方に振り返る。ルーイの声にドキツとしつつも

ジェミニ(小声で早口で)「ニシホ バレノイ イシビサ オヒビ」

(この後、ファルマウス人は、感情なく片言のしゃべりで)

ルーイの声「モンダイハ、ナイカ？」

ジェミニ「モンダイハ、ナイ」

ジェミニ、ルーイの声から視線を外すがルーイの声「ソレハ、ナンダ？」

ジェミニ「ソレハ、ナニモナイ。ココハ、ナニモナイ」

ルーイの声「ナラバ、ミセロ」

ジェミニ「ナニヲ、ミセル？」

ルーイの声「アルデハナイカ。マサシク、コレハ、キョウイ、ダ」

ジェミニ「ナニガ、キョウイ、ダ？ナニモナイ。ココハ、ナニモナイ」

ルーイの声「アルデハナイカ！コノ、チイサキ、ホシウミノ、スミノオクノ、カスカナ、

ホシニ

ジェミニ「チイサキ、ホシウミノ、カスカナ、ホシダ。ソレイジヨウ、ナニモナイ。キョウイ、ナド、アリハ、シナイ」

ルーイの声「キョウイ、デアル。ウゴメク、

モノハ、ミナ、キョウイ、ト、ナリウル」  
ジエミニ「イマダ、ミカイノ、ゲンシヨノ、  
モノダ」

ルーイの声「ヤガテ、オオキナ、キョウイ、  
ト、ナツテ、ワレラノ、マモリヲ、オビヤ  
カス。オビヤカサレルハ、ワレノミ、アラ  
ズ、イズレ、アマタノ、マモリヲ、ヤキツ  
クス」

ジエミニ「ナニガ、マモリ、ダ。ソレデハ、  
ナラバ、カレラノ、マモリハ、ドウナツテ  
シマウ？」

ルーイの声「マモリハ、スベテ、ワレラガ、  
オコナウ。ワレラガ、ミナノ、マモリヲ、  
シロシメス」

ジエミニ「バカナ！」

と、ルーイ、姿を表す。

ルーイ「ヤハリ、カ。マサカ、ワレラノ、マ  
モリニ、イヲ、トナエルトハナ」

ジエミニ、後ずさりする。

### ○神代（かみしろ）島 丘の上（夜）

ホサカ アユム（九） 天上の星空を睨み  
付けている。

アユム「空は、きらいだ！海は、きらいだ！  
星はもつと嫌いだ！この島も嫌いだ！みん  
な、みんな、大きらいだ！こんな世界、大  
嫌いだ！」

アユム、地面の石をひろい、星空に向か  
って投げる。

アユム「こんなに嫌いなのに、それでも星は、  
何食わぬ顔で、まるで遠い世界のように、  
ずっとピカピカ光ってる。そんな星が大嫌  
いだ！」

アユム、荒ぶった息を、すこし整え

アユム「事件は、いつも遠い世界のことだった。全部テレビが運んで来た。どこかの町の交通事故、知らない町の大きな火事、あつちの国で争いが起きて、そつちの国で人が死んで。それは全部、向こうの世界の、遠い世界のことだった。僕の世界は、毎日、嫌になるくらいの宿題と、明日は、あのイジワルをどう、やり過ぎすかと、これから発売される新しいゲームのことだけで、めいいっぱい、はち切れんばかりの、世界だった。そして、いつものように、お母さんは『行ってきます』と、やっぱりいつもの挨拶で、いつものように飛行機で、いつものように空に出かけてった。僕も、いつものように手を振って、いつものようにリビングに戻ってきた。そしたら、テーブルの上に、ポツンとお母さんの腕時計が、一人、忘れられて置いてかれてた」

アユム、ポケットから腕時計を取り出し、語りかける。

アユム「なんだか嬉しくなって、だれもないのに、君をこっそり、つけてみたんだ。お母さんの大切にしてる腕時計だからね。でも、つけてみたら、がっかりしちゃった。そして分かった。君は『忘れられた』んじゃない『置いてかれた』んだね。ちっとも動かない君の針をみて、僕はわかったんだ。そう、君も『置いてけぼり』になったんだ。僕と一緒に」

### ○ファルマウス船内 宇宙

ルーイ「オゴリ、タカブリハ、ワレラゴトキガ、スベキ、コトデハナイ。ワレラガ、ナスベキハ、タダヒトツ、マモリノ、メトナ

ル、ミミトナル。」

ジェミニ「ヤメロ！」

とルーイの右手に小さなスイッチ。ジェミニに見せつけるように、目の前に出す。ジェミニ「ソレハ！」

ルーイ、無感情にスイッチを押す。

とたんに高い金属音が鳴り響く。

するとジェミニの動きが止まり、ジェミニ苦しみ始める。

ルーイ「ワスレタカ。ワレラノ、ツトメハ、マモリノ、メトナル、ミミトナル。ソノ『メ』ハ、トキニ、ウチナル、モノニモ、ムケラルル」

ジェミニ「グ・グ・グ・グッ」

金属音、鳴り続ける。

ルーイ「ナゼ、ワカラヌ。マモリハ、キリツアル、ウツクシキトコロニ、ノミ、ウマレイデル。スコシデモ、ミダルレバ、マモリハ、モロク、クズレサル」

ジェミニ「ガ・ガ・ガ・ガッ」

金属音、さらに大きくなる。

ルーイ「ドウシ、ヨ、サラバ。マサカ、ホントウニ、ドウシガ、ウラギル、トハナ。コタビノ、チョウサハ、ドウシノ、ウラギリヲ、ロケン、サシメタル、タメノ、モノダッタ」

ジェミニ、苦しみもだえる。

ルーイ「コトハナサレ、サラニ、アラタナ、キョウイ、ヲモ、ミツカッタ。コノ、フタツノ、ヨキ、ホウコクニ、ホンゴクハ、サゾ、ヨロコブデ、アロウ」

ジェミニ「ヤ・メ・ロ！ ソウハ、サ・セ・ヌ！」

ジェミニ、渾身の力をふるい、右手を上

にかぎず。と一転、光り輝く船内が、赤くなる。

ルーイ(初めて感情をあらわに)「ナニヲスル!? バカナ!」

ジェミニ「サセヌ! コレイジョウ、ナモナキ、チイサキ、トモガラヲ、フミニジラセヌ。ナラバ、ワガミトモドモ、ツユトケス!」

船内に鳴り響く、緊急音声。と金属音。

ルーイ「ヤメロ! マモリガ、クズレル! ヤメロ!」

### ○神代(かみしろ) 島 丘の上(夜)

アユム、腕時計を自身の腕にはめる。

アユム「テレビはいつも遠い世界を映し出す。向こうの世界を映し出す、ぼくの世界と向こうの世界は、テレビを隔てて、遠い遠い世界だった。なのに、その日、初めて、テレビが僕の世界に侵入してきた。テレビに映ったお母さんの名前は(少し笑う)全部、カタカナで書かれて、なんだか可笑しかった。なんだか別の人みたいだった。どうせなら『お母さん』って書いてくれた方が、よっぽど納得するよ。これじゃ別の人じゃないか。でも、そのカタカナの人は、やっぱり僕の、君の、お母さんだった」

アユム、少し、泣きながら

アユム「空がきれいだ! 海が嫌いだ! 嘘つきが嫌いだ! 星になんか、なるわけない! そんな嘘つきが大嫌いだ! こんな世界、大嫌いだ!」

アユム、またも地面の石をひろう。

アユム「かがやく星が大嫌いだ! 僕はこんなに嫌いなのに、星は、何も知らぬ顔で、あの日からも、変わらず、ずっと、ピカピカ

と、まるで遠い世界のように、ひかり輝き  
続けてる」

○ファルマウス船内 宇宙

ルイーの声「ヤメロ！マモリガ！」

その後、大音響とともに、ファルマウス  
船、大爆破。

○神代（かみしろ）島 丘の上（夜）

アユム、星空に向かって石を投げる。

アユム「そんな星が大嫌いだ！」

○神代（かみしろ）島 岸壁（夜）

ムナカタの計器が鳴り響く。

ムナカタ「え？」

○神代（かみしろ）島 上空

まるで昼間のように、明るくなる。

○神代（かみしろ）島 丘の上（夜）

アユム「！」

○神代（かみしろ）島 岸壁（夜）

ムナカタ「！！！」

暗転

○神代（かみしろ）島

夏。青い海、青い空。照りつける太陽。

真っ白の入道雲。

波間に浮かぶ、小さな島。それが神代島。

○神代島 山中

森の中、木々が青々と生い茂り、日中も

光が射し込まない。遠くで蝉の声。



ざわ、ざわざわっ！と、草をかき分ける足音。かなり早い。

アユムの吐く息（息が荒い）「はあはあはあっ！」

アユムの足音　ざざざざっ！だっ！だっ！だっ！だっ！だっ！だっ！草をかき分ける音　バサバサバサッ！

アユムが、必死に走ってくる。

アユム「はあはあはあっ！…うつくつ…つくっ！」

アユム、後ろを振り返りつつ、目には涙。その後を、ハヤシ　ユキオ、乱暴に草をかき分け、棒を振り回して追いかけてくる。

ユキオ「おらああああっ！」

追いかけられるアユム。追いかけるユキオ。

アユム、もう走れない。へたり込む。

アユム「うううっ！　もう、いやだあ！」

体に付いた草を泣きながら必死になって払っている。

がさっ！と音を立て、ユキオ登場。

ユキオ「もう、終わりかあ？」

じり、じりつと近づくユキオ。

アユム「…ううっ！」

アユム、手元にあった泥の固まりをとつさに握る。

ユキオ、気づきながら、挑発的に睨む。アユム怯えつつ、その泥を投げる！が、全然違う方向。

その瞬間、アユムは脱兎のごとく走り出す。

ユキオ、泥を避けながら、「ちっ！」

ユキオ「やーいやーい、もやしっ子お！とつ  
とと島からでーていけえ！」

アユム、あふれる涙を拭いながらも、必  
死に駆けていく。

アユム、必死に駆ける！すると前方が開  
けてくる。

たどり着くと、崖が。……ついに座り込  
んでしまう。

アユム「ひいひいひい！はあはあはあ！！」

アユム、もう、一步も動けない。

アユム、ふと前を見ると、崖から吊り橋  
が掛かっている。その向こう崖の奥には、  
……洞窟。

吊り橋、かなり古く、ぼろぼろ。全て木  
と縄らしきもので作り上げられている。

見るからに、危険。

ユキオ、たどり着く。

ユキオ「へん、もう終わりかあ！」

アユム「はあはあ。ひいひい」

ユキオ「…偉そうな事、言っとつても、都会  
は根性無しじゃなあ！ ほらっ！」

ユキオ、手に持っていたカエルを投げつ  
ける。

カエル、ぴたっと、アユムの顔にへばり  
つく。

アユム「きゃっ！」

アユム、女の子みたいな声を上げながら  
払いのける。

ユキオ「ほらほら！」

と、腰に縛っているスチール製の四角い  
お菓子の缶から、

次はザリガニを取り出す。

ユキオ「次は、かみつくゾォ〜！」

アユム「はぐうつ…はぐうつ！」もう、声になつてない。

アユム、ジリジリと後ずさる。ふと、後方の吊り橋を見る。

ユキオ「ごくつ！」と唾を飲む。

と、アユム、意を決して吊り橋へ！あつ！と驚くユキオ。

しかし、そういった吊り橋を知らないアユム。勢いよく飛び乗り、一気に大揺れ。ギイギイきしむ。

予想もしていなかった橋の大揺れ！にアユム、パニック！

アユム「うわあ〜ん！うわあ〜ん！」

アユム、とうとう大声で泣き出す。

アユム「たすけてえ！たすけてえ〜！もうやめてえ！…いやあ〜！きやああ〜！！！」

アユム、泣きながら橋にしがみつくので、よけいに揺れる！

…橋、きしみ出す！完全にパニックになるアユム！！

きりきりっ、ぎりぎりっ！つと、崖に打ち付けられた杭に縛つてあるひもが、不気味な音をたて始める。

ユキオ、その光景に、マジになる！！

ユキオ「おっつけ！おっつけ！ゆっくり…ゆっくりな！」

しかし、まったく耳に入らないアユム。

ユキオ「こっちこい！ゆっくり、こっちこい！」

ユキオ、ゼスチャーをしながら。

しかし、アユム、全く動けない。

アユム「はがあ！はがあ！はがあ！」

ギシッ！ギシッ！シュッ！シュシュッ！

不気味な音が増す！

橋！完全に形が崩れ、落ちる寸前。

ユキオ、持っていた竹を差し出す。

と、アユム、なにを勘違いしたのか？び

くつと後ずさり：

ユキオ「こらあ！なにおびえてるんじゃない！これにつかまれっ！」

ユキオの声に、余計に怯えるアユム。

ユキオの顔に、かっど苛立ちの表情！

ユキオ「つかまるんじゃない、この木に！！」

アユム、やっと理解して、一步、歩みを進める！

と、とたんに、「がくんっ！」と橋が違う方向に揺れる。

アユム「きゃあ！」

ユキオ「かがめ！たつとるんじゃないか！かごむんじゃ！」

しかしアユム、言うことを聞かない。

ユキオ「きこえんのか！かがめ！ゆうとるんじゃない、かごめ！かごめ！」

アユム、ユキオの言っている言葉が…分からない。

しかし、一大決心！アユム、ユキオが差し出した棒が届く距離に飛ぶ！

アユム「わっ！」

ユキオ「あっ！ばかっ！……」

アユム、ユキオの差し出した棒を握る！ユキオも必死に棒を引っ張る！が、アユムの重さで、ユキオ引きずられ、二人とも橋の上。

吊り橋、キリキリキリキリキリッ…！シュッ！シュッ！シュッ！ シュ…ン…！

吊り橋、きしみ、ついに切れる！…ビチンッ…！

アユム・ユキオ「わあああああつ…！！」

二人いっしょに、崖下に投げ出される。

瞬間、小さな洞窟が、光を放つ！

暗転

### ○洞窟の中

真っ暗の世界。少しだけ、下手から光が差している。

(音) ぽちゃん！ぽちゃん！ 水の滴る音。

アユムの声「う…う う…う…」

しずくが、アユムの顔にまた、ポチャンと落ちる。

アユムの声「冷た！？ん？…」

薄暗い洞窟の中、アユムとユキオは仰向けになって寝ている。

ユキオの声「いててててっ！」

アユムの声「えっ？」

ユキオの声「真っ暗！」

アユムの声「きゃ！」

ユキオの声(大声)「ぎゃ〜！」

アユムの声「え？え？ ユ…ユキオ…くん？」

ユキオの声(大声)「ぎゃ〜！ぎゃ〜！」

アユムの声「ユキオくん！ユキオくんだよね

？」

ユキオの声「そんな声は、もやしっこ！」

アユムの声(小声)「やめてよ。その言い方」

ユキオの声「なんだ？ ここ、俺たち、どう

したんじや？」

アユムの声「うっ…うーん！？」

ユキオの声「ん？ここ、ここ、どこなんじや？」

アユムの声「も、もしかして…まさか…洞窟の中？」

ユキオの声「はあ？なんで？」

アユムの声「ほら（と、下手、指さし）あっちから光が差してる」

ユキオの声「それにしても、おかしいぞ…

さつきは、おまえを追いかけとつてえ…」

アユムの声「…」

ユキオの声「んで、橋におまえが乗ったから、ああ！そうじゃ、おまえ、なんで、かがまんかったんじゃ！」

アユムの声「うっ…」

ユキオの声「そんじゃから…」

アユムの声「僕は必死に棒をつかんで！」

ユキオの声「それを俺が必死に引っ張って！」

アユムの声「そしたら橋が、グラングラン揺れて！」

ユキオの声「ついに吊り橋は切れて!?!」

アユム・ユキオの声「え?!?!あれ？落ちた!?!」

すると、上手から、歌声？メロディ？音

？とても小さい音が、聞こえてくる。（

かごめかごめのメロディ）

アユムとユキオ、おそろおそろ音の方を向くと…洞窟の奥から、かすかに、紫色から藍色の光が漏れている。その光に、揺らぎが…

アユム・ユキオ「…?」

アユムとユキオ、おそろおそろ奥へと進む。

すると…まるで呼吸するように、光が強まり弱まり、また強まり…そして、その中心に…人影…女性?!



って、駆けていく。

洞窟の奥から、かすかに漏れていた藍色の光が…さらに強まる。

アユムとユキオ、走る！走る！無我夢中で走る！！

野山駆け巡り、山のふもとの、小高い丘に、たどりつく。

ハアハアハアと、息が切れているアユムとユキオ。力つき、丘の上に大の字になり、寝る。

アユムとユキオ、寝っ転がり、息を切らしながら

アユム「早く、お巡りさんに…」

ユキオ「まで！」

アユム「なぜ？」

ユキオ、半身起こし、怖い顔を、ズンズンとまだ息の荒いアユムの顔に近づけながら…

ユキオ「橋…あの吊り橋、絶対…絶対に渡っちゃいけない橋じゃったんだぞ！」

アユム「？」

ユキオ「しかも、落としてしもうた！大人にゆうてみい！ただじゃ済まん！きつと怒られる！コレは…だあくれにもゆうてはイヤン。絶対やゾ！」

キツと睨むユキオ、押されるアユム。

アユム「で、でも…」

ユキオ「でも、なんじゃっ？！」

アユム「……はし、あつたよ！あつたよ！はし、あつた…ねえ！あつたよ！ちゃんと、ねえ！？」

ユキオ「………」

アユム「それに…」

ユキオ「…それにつ！？」





が、ばっちは、ボケて、嘘ばかりじゃ  
！ち、ゆうてるもん！」

おばあさん 「いんや。うそではねえ。げん  
にガムラヒコさまの声を聞いたもんは、こ  
の島には大勢おる。最後は…いつじやった  
かのお？あれは、もう、わしが生まれた頃  
だからだから…：…そう、かれこれ八十年く  
らい前かのお。」

### ○おばあさんの昔話

おばあさん 「それは…：…そう、やっぱりこんな  
暑い夏じやったそうな。その夏は…：とりわ  
け、ひどく暑かったそうじゃ。ちようどそ  
のころ、日本は戦争してたんじゃ…：」

アユム 「え？戦争！うそっ！」

おばあさん 「ホントじゃ。」

ユキオ 「で、日本は勝ったの？」

おばあさん 「いんや。」（ただ、首を振  
るばかり）

ユキオ 「ふーん、でも、今だったら勝つねえ  
！」

アユム 「そ、そうかなあ？」

おばあさん 「戦争にや、勝つも負けるも無  
いんじゃよ。どっちも悲しいもんなんじゃ。  
好きな所が壊されて、好きなことも出来ん  
ようになる。今まで美しかったもん、楽し  
かったもんがすべて、灰色に塗り替えられ  
る。そして人は、人を…：平気で殺してしま  
うように…：。人間が、その魂を抜かれる時  
なんじゃ。魂を抜かれた人間は、もう人間  
じゃあねえ。いままで愛しかったもの、い  
ままで大切にしていたもん。それが、分から  
んようになっっていく…：。戦争は…：人間を変  
えてしまうんじゃ。」

照りつける太陽に、その皺だらけの顔を  
上げながら…

ユキオ「ふーん！」

アユム「……」

おばあさん 「それで、ちょうど八月に入っ  
てから、もう日本はどこもかしこも焼け野  
原になって、なーんも残つたらんようにな  
ったころ…この島を最後の砦にする！村の  
物はすべて出せ！残ってる女・子どもは全  
部手伝え！って、突然、本土から大將さん  
がやって来たそうじゃ。たしか…六日じゃ  
ったかのお」

◇村の八幡様の境内に集められる村人。セピ  
ア色。

(もし、演出で村人を描く場合のため、  
イメージカットは残します)

おばあさん「で、朝方、村の八幡様の前で点  
呼を取つとたとき…北の空が光ったかと思  
もおたら…とんでもねえ音がしたそうじゃ  
村の者も、初めて聞く音じゃ、びっくりた  
まげた。したら、次の瞬間。それに比べも  
のにならんくらい大きな音が、声が。怒  
ったような、泣いたような、そして悲しそ  
うな、それがガムラヒコ様の叫びだったん  
じゃ。

村のもんも、その年に入ってから、とき  
たまガムラ様の叫びは聞いておったんじ  
やが、そんな時のヒコ様の声は、比べもの  
にならんくらい大きかったそうじゃ。そ  
んで、肝をつぶした大將さんは、とうと  
う島から逃げたってのお」

アユム、ユキオ、神妙に聞いている。

おばあさん」で、五日くらいたったのかのお  
？やっぱり暑い日の、もうちよつとお昼  
つてじぶんにも、やっぱりガムラヒコ様の叫  
びがきこえたそうじゃ。前よりも、もつと  
悲しく、もつと怒りのある声で。そう、そ  
のとき、この日本に…原爆が落とされたん  
じゃ。それで、大勢の人は死に…、大勢の  
人は大切な物を失い…それだけじゃない  
…。そんな中を懸命に生き残った人々も  
…それから長々と続く…  
……」

おばあさん、言葉に詰まる。

それをのぞき込むアユムとユキオ。おば  
あさん、それに笑顔で答える。

バラツ！バラバラツ！突然、大粒の雨の  
音。そして、ザア  
つと、夕立。

おばあさん 「…あらあら！（赤くなった目  
頭を押さえながら…）とうとう降ってきた  
のお…。」

と、アユムとユキオを縁側から部屋の中  
へ。

## ○部屋の中

アユム「…それで…、おばあちゃん、その  
…ガムラヒコ様って…？」

あばあさん 「おお、そうじゃったのお！」

## ○ガムラの伝説

おばあさんの語りで。

昔々のことじゃった。まだまだこの国が、  
日本と呼ばれとらんころ…。

◇荒れ狂う暗闇の海を大きな泥船がやってくる。

海を渡りし、ガムラヒコ。大きな大きな土の船で流されて。

この島に、たどり着きしはガムラヒコ。見るや土船、とたんのうちに山となり、二度と船にはもどらんかった。

◇ガムラヒコ。体中、泥だらけ。

島に降り立つガムラヒコ。かのちの戦（いくさ）でやぶれたそうな。

この島に、一人つきしは、ガムラだけ。あまたのなかまは、みな死んだ。すべては戦場（いくさば）の草露となり。

嘆き悲しむガムラヒコ。大きな目玉に、大粒涙。ガムラが泣けば、雨が降る。

怒り狂うはガムラヒコ。ガムラが怒れば、雷雲よびて、いたるところに、雷（いかずち）落とす。

◇嵐の中、吼え続けるガムラヒコ。

ガムラの嘆きは天の嘆き。ガムラの怒りは天の怒り。

百日百晩、えんえん続くが、ついに、ついでることはなし。

おばあさん「そうして、島はみるみるうちに荒れ果てしまったのお：島のもんは、困っ

てしもうた。そんなときじゃ、ちようど島に訪れとった一人の修験者がおつてのお。

ガムラヒコの怒りを静めるには、生娘をひとり、生け贄にすればよい。そう、いいなすった。で、村人は困つてのお。どこの家も、娘を出すとは、よういわん。そんなときじゃ、父親は海に漁に出て嵐に遭い、今は母一人、娘一人という家があつて。そこ

の娘は大変気だてのええ、村一番の娘っこじゃった。でも、父親が死んでしもうとる。女子どもじゃ、この痩せた大地を耕すこともままならん。

◇凜とした表情を持つ娘

おばあさん「『わたしがガムラのところに行く代わりに、おっかあを』こうしてその娘、市野（いちの）は、ガムラヒコ様のもとへ、めしだされたのじゃ。それから十日、激しい雨風が吹き荒れたが、十一日目の朝、あれほどふつとつた雨もあれほどなつとつた雷も、ピタッと止まった。

◇久々に雲より太陽が差し込める。わきたつ

村人。木々がキラキラと光っている。

おばあさん「それからというものじゃ。ガムラヒコ様は、この島を守ってくださいるようになったんじゃ」

おばあさん「村のもんがあやまつて、崖から滑り落ちると、ひよいと拾い上げ」

◇村人が山に。崖から足を滑らせると、ひよいと受け止めるガムラヒコ。

おばあさん「島に嵐が襲ってきよつたら、そらあ、ガムラ様は海に向かって仁王立ちして嵐を吹き飛ばし」

◇真つ暗の海、荒れ狂う嵐。殴りつける雨。

ガムラは海に

仁王立ち。両手を広げる。

おばあさん「まつこと、ガムラ様は、この島の守り神なんじゃ」

◇切れている吊り橋、ガムラヒコが口笛ふく

と、草がヒュルヒュル伸びてきて…。

### ○部屋の中

アユム「市野様は、食べられちゃったんだねえ。」

おばあさん 「ほっほっほっ 食べられちゃいねえよ。ガムラ様は、市野様を本当によく可愛がられた。市野様は年に一度、十日間だけ里帰りを許され、村に戻ってこられた。そして、市野様は、わしらの知らん病気の直し方や、その年の天の移りよう。漁のこと。そして、ガムラ様がきんさった海の彼方の話…いろいろ話して下さった。それで村は何度も救われたんじゃ。

そして、おお！そうじゃ、そうじゃ！子どもたちにはこの歌を…」

かーごめ かごめ かーごのなーかの、とーりーは、

いついつ、でーやーる、よあけくのぼんに…

アユム・ユキオ「あっ！」

アユム「さっきの、洞窟の、「かごめかごめ」だったんだ…」

おばあさん 「…後ろの正面だあーれえ。…

これにて、ばあの昔話は終わりじゃ」

アユム、ユキオ、へえくつと長い息をつく。

おばあさん「おやおや、麦茶がのうなったの。ちよつとまつとれよ」

お婆さん、立ち上がり、奥へと入る。

アユムとユキオ、お婆さんを見ながら

アユム「あれって…本当にガムラヒコだったの？」

ユキオ「…」

アユム「…ほ、ほんとうに？僕らは夢を？」

蟬がまた大声で泣き出す。

暗転

### ○市野丘（朝）

ユキオ、まだまだ青いねこじやらしを振り回しながら、楽しそうに歩いてる。その後をアユム、真剣な顔つきで付いて来てる。

ユキオ「さっ！今日は、何しよ？ どうせなら、魚取りにでも行くか？」

アユム「あの…」

ユキオ「お！それより、虫取にするか！」

アユム「ねえ…」

それを遮るように、

ユキオ「…なあ、カブトムシ、取りに行こうか？いっぱい取れる秘密の場所、あるんじゃないっ！」

ユキオ、変に親切。

アユム「…時計…返してよ！」

ユキオ「！」

アユム「ねえ！時計返してよ！あれ、大切な時計なんだよ！」

ユキオ「あっ？あ…？」

アユム「ねえ！はやくう〜！！」

ユキオ「あ…！ああ！あれ？あれ…！ああ！また、今度なっ！」

アユム「なんでっ？今すぐっ！………返して！」

グツとユキオを見つめるアユム。

ユキオ「今は…な・い…ゴメンっ！」

アユム「な…い？！」

アユム、だんだんと顔をくしゃくしゃに



していき、とうとう泣き出す。

ユキオ「な、なんじゃ！無くしたわけじゃないぞ。今は無い！つてだけで…」

アユム、よけいに泣き出す。

ユキオ「だから…そんな大切なもん、おまえが見せびらかすんが、いかんのじゃ！」

アユム「ひっく！ひっく！……あ、あれ…

…か、かあさんの…かあさんのなのに……。

」

気まずい雰囲気。ユキオ、懸命に取り繕う。

ユキオ「あ、いや、だから、無くしもたんじやなくて…」

アユム「しくしくしく……」

ユキオ「あるところは、分かるとるんじや！

な、だから、けっして無くしたわけじゃ、

ない！」

アユム、どンドンユキオに詰め寄りながら

アユム「どこっ？どこなの？」

ユキオ「あの、その……」

アユム「どこなのっ？」

ユキオ「いや、だから、」

アユム（大声）「どこっ!？」

ユキオ（大声）「…あの…洞窟っ!……」

アユム「…え?……」

セミの音……じい……わっ

暗転

## 〇中

アユムとユキオ、全身完全装備、と言っ

ても麦わら帽子、懐中電灯、虫取り網や

バットや木の棒、リュックには花火など。

ユキオ「なあ、ホントに行くんか!?今日は、

やめとこうや！」

アユム「……」

ユキオ「な、なんや、なんや！その目！」

アユム「ホントに、取りに行く気、あったのっ！？」

ユキオ「うっ！…あつたわい！明日来ようとして…」

アユム「あしたは、浜に行く！つて騒いでたやん！」

ユキオ「あら？そつだった？」

アユム「……行くぞっ！」

ユキオ「はいっ！…つて、あれっ？なんか強くなつてない？」

### ○吊り橋

アユムとユキオ、何度も何度も、吊り橋を見る。しっかり確かめる。吊り橋はきれいに直っている。

アユム「や、やっぱり、直ってる！な、なんだろう？」

アユムとユキオ、ゆっくり、吊り橋を渡り、洞窟の前へ。

アユムとユキオ、洞窟の前でお互い向き合い、力強くうなづく。二人、洞窟の中へ。

### ○洞窟の中

アユムとユキオ、懐中電灯を握りしめながら、地面を一生懸命、照らしながら

ユキオ「た、たしか、ここで…あんどき…」

アユム「暗いなあ！よくわかんないや」

洞窟の奥で、ぽちゃん！ぽちゃん！…と水の音。

ユキオ、ドキツとして

ユキオ「お、おい、さつさと見つけたら、早く、けえるぞ！」

洞窟の奥からかすかな青い光が漏れる。

アユム「あ！…！」

アユム、なにかに魅入られたように、すうすうと奥に、ユキオの目の前を通って、洞窟の奥に入っていく。

ユキオ「お、おいおいおい！見つけたんかった？」

アユムに反応するかのごとく青い光、グン！っと強まる！

アユム「お、おか、…あさん？…！」

ユキオ「で、出たあ〜！！うう〜花火花火！」

さらに進んでいくアユム…。あたふたと花火に火を付けるユキオ！！

アユム、洞窟の奥へ、たどり着く。

するとそこには…青色に光を放つ、

美しき女、ルーイ。

アユムが来たことに気付き、ゆっくりと

視線を上げる。

それを、見守るように、見つめるアユム。アユムのこわばった顔、しかしルーイの顔を確認すると、力が抜けたように…あわせて、すこしほろ苦い顔のアユム。

そこへ…ユキオ、大声を上げながら、火の付いた花火を持って、乱入！

ユキオ「うわあああ〜！」

振り向くアユム「なっ！」

同時にルーイ、いままでの緩やかな動きから一転、突然、絶叫。

ルーイ（大声・絶叫）「ぎやあああ〜！！」

その光景にユキオ、呆気にとられ、動きが止まる。

アユム「は、火花っ！」

ユキオ、とつさに花火を地面に投げ捨てる。ジュツと、消える花火、あわせて懐中電灯も投げ出してしまふ。カラカラカラカラツ。地面を転がっていく懐中電灯。まだまだ息が荒いルーイ。光も弱まってる。

アユム「…け、怪我してるの？それとも…」  
転がった懐中電灯に照らし出されるルーイ。いままで暗くて分からなかったが、全身泥だらけ。

暗転

## ○川

大きな川。大きな石が何個もあり、自然のプールのようになってる。岸でルーイが水を不思議そうに眺めつつアユムとユキオは、岸で、ルーイの方を見ずに、喋ってる。

ユキオ「だ、大丈夫なんか？なんか、変じやぞ！」

アユム「大丈夫…と、…思う…。」

ユキオ「そうかあ？ありや、ぜったい人間じやねえ」

ルーイ、川面を見つめるが、ちよつと指を入れてみる。

アユム「そんなことないって。どう見ても人間だよ」

ルーイ、水の冷たさ、水の流れに、気持ちよさそうに指をくぐらせる。

ユキオ「そうじゃなくてえ。えーつと、なんちゆうか…地球の人間じゃ…なくて、なんてか…うちゆう…人じゃねえか？」

少女、そつと川の中へ。すると泥が川の

流れで洗い流され…しかも着ていたボデ  
イースーツが緑色、そしてうつすらと透  
明に…。

アユム「そうかなあ！宇宙人なら、もっとへ  
んてこな…あんなに…人間っぽくないよ！」  
アユムとユキオ、ルーイの方を振り返る  
！！と…

川の中に、何も身につけずに（本当は付  
けている。光の加減）気持ちよさそうに  
水浴びしているルーイ！

ユキオ「う、うひゃあ！」

アユム「見ちゃダメ！」さっと、後ろを  
向く。

ルーイ、それを不思議そうに見返す。

※※（ここ辺り、舞台でどうやるか、思  
いつかず）

川で遊ぶアユム、ユキオ、ルーイ。ルー  
イのボデイースーツも十分に水を含み、  
今はちゃんと緑色をしている。

たあー！と、大きなひょうたん型の岩  
から飛び込むユキオ。

ばっしやあゝつ！と、大きな水しぶき。

キラキラと虹。

ルーイ、そのしぶきを笑顔で浴びる。と、  
突然、驚く！

なんとユキオ、潜ったまま、ルーイの足  
を引っ張った。

バシャーンと川の中に倒れるルーイ。

アユム（心配そうに、困ったように）「あつ  
！」

しかし、ユキオ。悪びれもせず、川面か  
ら上半身、出して笑っている。

と、ユキオ。その場に飛び上がる。

ユキオ「いつてえ〜！」

アユム「え？」

ユキオ「ちくしよー！仕返しされた〜！つねられた〜！」

ルーイ、川から笑顔の顔をのぞかす。

アユム、その笑顔にドキリとする。

アユム、ユキオ、ルーイ、川辺に上がってきて座り込む。

アユム「ぼくはアユ…」

ユキオ「あ！こいつアユム。で、おれユキオ。

お姉ちゃんは、なんち言うの？」

ルーイ「……………」

アユム「…（ユキオにムツとした表情をしながら）じゃ、どこから…」

ユキオ「あ！そうじゃ！どこから来たの！ね

え！ねえ！」

ルーイ、すこし悲しげな、そんな表情。

そして、天を仰ぐ。

アユム「…そら！？ 空から…？」

ルーイ（ゆっくり）「ユ…キ…ヲ… ア…ウ

……………？ る…い…」

ユキオ「え？なにっ？」

ルーイ「ユ…キ…ヲ… ア…ウ……………？ る…

…い…」

アユム「『あう』って…ぼく？」

ルーイ「…ユ…キ…ヲ… る…い…」

ユキオ「やったあ〜！そう、ユキオ。で、お

ねえちゃんは、ルーイ！？」

するとルーイ、空を見つめながら、ゆつくりと『かごめかごめ』のメロディーラインを口ずさむ。

聴き入るアユムとユキオ。

すると、切り立った山々の奥より…ざわ

ざわと、鳥の大群が飛び立つ…一陣の風が、その場を通りすぎる……。と、大きな影！ガムラヒコ、登場！ルーイの歌が止まる！ルーイ、恐怖のあまり、とつさにユキオにしがみつく。それを見てしまったアユム。

固まるアユム、ユキオ、ルーイ。巨大な、ガムラヒコ。

ガムラヒコ、アユム、ユキオ、ルーイを一瞥すると、うつすらと風景の中に消えていく。

アユム「やっぱり…本当に、いたんだ…」

暗転

## ○川

ユキオ、沢ガニを捕ろうと、けんめいに石をひっくりかえしてる。ルーイ、川辺に腰掛け、その光景を楽しそうに見ている。

その横に、アユム、座っている。

アユム「お姉ちゃんは、市野様なの？それとも…」

しかし、ルーイ、ユキオのカニ取りに夢中。全然こつちを向かない。

ユキオ、取れたばかりのカニを摘んで「にい〜」っと笑っている。それに笑顔で返すルーイ。

アユム「……………」「深いため息。うつむいてしまう。

ルーイ「？」

と、その時…ジェット音が上空から鳴り響く。

ユキオ（見上げる）「うわあ〜！初めて見た  
あ〜！ジェット機！」

ルーイ（絶叫）「ぎゃあ〜〜！！！」

その叫びに、アユム、ユキオ、止まってしまう。

ルーイ、がたがたと震え続けている。

アユム「大丈夫っ！？」

ルーイ、それでも、震え続ける。

ユキオ、ルーイの所へ、さっと飛んできて背中をさすってやる。

ルーイの体が、黄色の光を発する。強く、弱く。強く、弱く…。ユキオ、懸命にルーイの背中をさする。

それを、ただ見守るだけの、アユム。

暗転

### ○洞窟への道 夕暮れ

太陽を浴びて、シルエットになるアユム、ユキオ、ルーイ。

しかし、ルーイの手を引つ張っているのはユキオ。

ユキオ、何かルーイに話しかける。ルーイも笑っている様子。

その後ろを、アユムが一人、俯いて、とぼとぼと歩いていく。

アユム、なにか話しかけようと、立ち止まり

アユム（小声）「あ、あの…」

しかしユキオとルーイには聞こえず、二人とも歩みを止めず。

アユム（つぶやき）「ごめん。さきに帰るよ」  
ユキオとルーイ、気付かず、歩いて行く。  
アユム、ひとり残されて。

アユム「……しかたないよ。何も出来なかった



たんだもん。何も…なにも…ちつとも…」

アユム、悔しく、悲しく、怒った顔。

アユム「きらいだ！きらいだ！きらいだ！きらいだ！きらいだ！だいきらいだ！なんで僕だけ、いつも！ちくしょう！なんだよ！勝手に！時計、なくしやがって！勝手に落として！僕が助けたのに！勝手に仲良くなって！」

アユム、空を見上げ

アユム「アイツも、母さんなんかじゃない！なんだよ！僕が助けたのに！全然！僕の方、全然、見ないで！あいつとばかり！なんだよ！きらいだ！きらいだ！大嫌いだ！」

アユム、息を荒げつつ、涙があふれて

アユム（大声）「ちくしょう！ちくしょう！ちくしょう！ちくしょう！」

暗転

### ○島の派出所前 夕暮れ

小さな派出所。その前にアユム、立ち止まっている。

落ちかけの真っ赤な太陽が、アユムの背をさす。伸びる、影。

派出所内から、警官が出てくる。

警官（柔和に）「なんか…あつたんかね？」

アユム「…う…」

じわじわじわじわじわじわ　大きく、

蝉の声。

あわせて、アユムの心臓の音。

ドクッ！ドクッ！ドクッ！ドク！

アユム（小声）「…あ、あの…や、山に…なんだか…不思議な…ものが…」

しかし、アユムの声、小さくて、全然聞き取れない。

対比的に心臓の音が大きくドクンっ・ド

クンっ・ドクン！！

警官「え？ なあくに？ まっ！外じやなんだし、中に入りなよ。あ、そうだ、ちよつと待ってて」

警官、奥に入っていく。

最大音量で激しく高鳴るアユムの心臓の音。

ドッ！ドッ！ドッ！ドッ！ドッ！！

警官、奥から出てきて

警官「で、山で、なにか見たのかな？」

ドッ！ドッ！ドッ！ドッ！ドッ！！

ミシミシミミミ… ミン！ジジッ！ 蟬が飛び立つ。

アユム、ハツとした顔。急に怖くなった、悔しくなった、歪んだ、顔。アユム、急に逃げ出す！

警官、あっけに取られて

警官「あ！ちよつとおく、あらら、行つちやったあ！変な子だなあ！…つと、すいませんでした。では、早速。」

奥から、ムナカタ、出てくる。

ムナカタ「はい、実は昨夜、…」

暗転

### 〇いろりの間 おばあさんの家（夜）

アユムとおばあさん、いろりを中心に二人で食事中。

しかしアユムは、ぜんぜん箸が進まない。おばあさんは、アユムのことを気にしながら、一方で外の様子も気になる。それは遠くで、人々の声が聞こえるから。

どうも、大勢の人々が集まって、なにか、しきりに話している様子。

おばあさん「こんなもんしかねえけどなあ。

おばあの料理は、アユムの口に合うけ？」  
アユム「……」

おばあさん「…なんか外が騒がしいのお、なんか、あつたんかいなあ？…」

アユム「…」

おばあさん「アユムや、あとでいいけに、ちよつと聞いてきてくれんかのお？」

アユム、食べ終わらずに、

アユム「もう、いい…もう、寝る…」

アユム、言うかいわずか、奥の部屋に行く。

おばあさん、沈んだ面もちでアユムの後ろ姿を見る。

### ○奥の部屋（夜）

アユム、布団を頭から、かぶっている。

おばあさん、ふすまよりそれを見すると、大きなため息、そして外へ様子を見に出て行く。

リリリリリ…リリリリリ…と、虫の音がしている。

アユム、ふとんを被って、身動き、ひとつせず。

その音に紛れて、小さく、素早く、

ユキオの声「アユっ！」

アユム、その声に弾かれたように、どきん！と大きく体をのけぞる。しかし、その後、さらに頑なに、固まる。

アユムの心臓音、ドッ！ドッ！ドッ！ドッ！ドッ！

ユキオの声「アユっ！アユっ！」

アユム、ふとんにくるまり、ガクガクと震えている。

アユムの心臓音が続く。ドッ！ドッ！ド

ッ！ドッ！ドッ！！

アユム（小声）「みんな嫌いだ！」

ユキオの声「アユッ！アユッ！」

アユムの心臓音、さらに高鳴る。ドッキ  
ンドッキンドッキン！

アユム（小声）「僕のせいじゃない！」

ユキオの声「アユッ！大変だっ！大変だつて  
！……」

アユム（小声）「みんな大嫌いだ！」

アユムの心臓音、ドンドンドンドンドン  
ドンドンドン！

ユキオの声「山狩りだっ！山狩りだぞっ！姉  
ちゃんが、姉ちゃんが、つかまつちまう！」

アユムの心臓音、ドンドンドンドンドン  
ドンドンドン！ドッキーン！

アユム「！……」

弾けたように床から飛び出すアユム！

アユム、縁側から飛び出す。と、そこに  
はユキオ。

アユムとユキオ、走り出す。

アユム、怖い顔をして、走っていく。後  
を追うユキオ。

アユム「……………！」

ユキオ「な、なんか、とおちやんたちが、」

アユム「……………！」

ユキオ「今から、山狩り…ゼエ！…するとか  
…」

ユキオ「なんか、山に、出たって、それで、  
それを捕まえるために、山狩りするって…  
で、でも、このままだと…ねえちゃんが、  
捕まっちゃうよ！」

しかし、アユム、一言も返さない。ただ  
ただ必死に山へと駆けていく。ユキオも、

アユムについて行く。

暗転

### ○山のふもと 市野丘（夜）

大勢の男たち、消防団の半被を着込んで、ザワザワと盛り上がっている。たいまつを囲みながら、男たちは用意された肴で酒を酌み交わす。

島の男A「そういや、前の山狩りは、二〇年前かのお！たしか、あんどきや足立のじいさまが、猟銃で…」

島の男B「しかし、どえらいことになったもんじゃ、まさかこん島に、化けもんが出るとはなあ…」

奥では消防団長を中心に数名の団員が、地図を広げながら山狩りの検討が始まっている。

その横にムナカタと警官、必死に頭を下げながら

ムナカタ「いや、ですから本当に異星人であつたら、それはそれは、とても素晴らしいことぞ！」

警官「あんたが話すと、ややこしくなるって！（消防団長に向き直り）や、だから、やたらに騒ぎを起こさんで、ほしいのです。まだ県の方からは、なんも言ってきておらんので」

消防団長「いつもそうじゃ。いつも、なんかがあつてからじゃないと動いてくれんじやろう！昨日の夜の空が光ったとは、ようけ島のもんが見とる。それにどうも、今朝から山の様子がおかしい。じいさまが言うような、ガムラ様じゃねえが……」

ムナカタ「ガムラ様？なんですか？それ？」

警官「だから、あんたはだまっとれ！（消防

団長へ）だからこそ、慎重に、ここは県本

部の命令を待ってですね…」

消防団長とムナカタと警官の声は続く。

それをアユムとユキオ、離れた草むらで  
聴いていた。

アユム、駆け出す。ユキオも続く。

暗転

### ○洞窟の前（夜）

アユムとユキオ、ハアハア息をつきなが  
ら洞窟の前に立っている。いまだ強ばっ  
ているアユムの顔。それに押されるユキ  
オ。二人、中に入る。

奥から、橙色のか弱い光。ルーイ。様子  
が変。苦しんでいる。

ユキオ「お、おねえちゃんは、もしかして本  
当に、うちゅうじん、じゃ…」

が、アユム！堰を切ったように、ルーイ  
に、しがみついて、泣いてしまう。

アユム「ご、ごめん！ごめん！ごめん！ごめ  
ん！…ごめん！…ごめんなさい！うつつ  
うっ！」

ルーイ、アユムを、やさしくいたわりな  
がら、アユムの頭を全身で抱いてやる。

「かごめかごめ」のメロディを口ずさみ  
ながら……。と、ルーイ、かくんと力尽  
きる。

アユム「お姉ちゃん！」

橙色が赤みを帯びてきている。

その時、遠くから、山狩りの声が…！  
突然すみかを照らされた動物たちが、山  
を駆けめぐる音。

飛び交う村人たちの声。逃げまどう動物  
の鳴き声。

ユキオ、その音を聞いて

ユキオ「だめじゃ！みつかつちまう！こんま  
まじゃ、ねえちゃん、死んじゃうよ！」

アユム「…：ガムラヒコの…：ガムラヒコさま  
のところに、行こう！」

ユキオ「えっ！ガムラのところに？ダメじゃ  
！危険じゃ！」

アユム「でも、ねえちゃんを助けるには…」  
ユキオ「そいでもっ！？」

アユム「他にないだろっ！？」  
ユキオ、アユムの気迫に押されて、返事  
できない。

暗転

### ○裏山へ続く山道（夜）

淡く、か細い光が、ゆつくりと、暗い山  
を進んでいつている。ユキオとアユムと  
ルーイ。

アユムがルーイをおんぶしている。ヨタ  
ヨタと歩きながらも。

アユム「ライトはダメだよ！見つかつちやう  
よ！」

ユキオ「なんで！」

アユム「場所がわかつちやうだろ！」

ユキオ「でも…」

アユム「でも？」

ユキオ「…：姉ちゃんが、光つとるよ！」

アユム「…：そ、そうかあ…」

ルーイ、か細くも、まだ…赤く光っている。

しかし、だんだんと『紫・藍・青・緑・黄色・橙・赤』

それぞれの光が、まだらのようにルーイの体を流れ始める。

アユムの歩みが、遅くなる。ユキオ、心配して

ユキオ「アユ？大丈夫？代わるか？」

アユム「だめだよ！ユキオしか、道、分らないんだろ！？」

ユキオ「わかるったって、山の裏の、一本岩って話だけじゃから。だいたい、だれも行ったもんは、いないんじゃないぞ！！」

と、アユム、よろける。

ユキオ「ホントに大丈夫か？」

アユム「へっちゃら！へっちゃら！男の子なんだから！」

の瞬間…！！

アユムの耳に、ルーイの苦しみで発した吐息が…ふりかかる。

ハッとするアユム、立ち止まってしまう。

アユムの顔、真っ赤に。

ユキオ「……………！？でも、今日はなんだか、星が明るう感じんか？」

暗転

## ○山のふもと 市野丘（夜）

ムナカタ、衛星電話で話している。

ムナカタ「はあ、はい。すいません。やあくだから、これがファースト・コンタクトだったら…」

電話の声（大声）「山狩りって何だ？なんで



そんな事になったんだ!？」

ムナカタ「はい、ですから、何度も何度も中止を要請したんですがねえ…」

電話の声（大声）「バカヤロ!当たり前だ!」ムナカタ「それよりさっきの話、ホントですか?各国の監視衛星も、昨日の電波を観測したって…」

電話の声（大声）「バカヤロ!それよりもまず、山狩りを何としても止めさせろ!分かっているのか!」

ムナカタ、衛星電話を耳から外して、辟易した顔。と、ハツとして衛星電話を耳に押しつける。

ムナカタ「え?ホントですか?地球圏内に未確認飛行物体が、多数進行中!こ、これは…ホントに!」

電話の声（大声）「バカヤロ!お前がすべきことは、山狩りの中止だ!」

暗転

### ○裏山（夜）

アユム、ルイー、ユキオ、とうとう裏山に到着。

そこには、まさしく一本、大きな岩がそびえ立っている。

岩というより、すでに山。巨大な墓標のよう。

そして、まわりの山々は、まるでその岩を隠すように。

一方、海側は険しい岸壁が幾重にも連なっており、海から見ても、一本岩は見つけられない。

ユキオ、一本岩を見上げながら

ユキオ「は、初めて見たあ!こんななって

たんかあ！で、でけえ〜！」

一本岩、天に達するかのようになり、そびえ建っている。

ユキオ「こ、ここが、ガムラのいるって、とこなんじゃけど、…なあ、ここなら、だれも来んじやろな…」

と、突然

アユム（大声）「おーい！おーい！ガムラヒコオ〜！」

ユキオ（ビククリして）「なっ！」

アユム（大声）「ガムラヒコオ〜！」

ユキオ「なにするんじゃ！ガムラが出てきたらどうするんじゃ…」

アユム（さらに大声で）「ガムラヒコオ〜！！」

すると『があ〜ごおお〜！！』と地鳴りのような大音。

その瞬間、ガムラの掌の輪郭だけが闇夜の中に…：…かすかに生じ、アユム、ルーイ、ユキオをぬう〜つと、掴んでしまう。

暗転

### ○一本岩の頂上（夜）

アユム、ルーイ、ユキオ、気付くと、一本岩の頂上に来ている。

風がビョオビョオと吹きすさぶ。風に煽られそうになる。

ユキオ「な！な！なっとなっとなっとな…もう、なに起こっても、驚かん…」

と、言いかけたまま、一瞬、気を失いそうに…。

アユム、背中からルーイを下ろし、横にする。ユキオ、心配そうに見ている。

アユム「ガムラヒコ！姉ちゃんが危ないんだ

！助けてくれ！」

アユム、闇夜に向かって叫ぶ！

しかし、ガムラは何も答えない。

アユム「お願いだ！ガムラヒコ！どうしても姉ちゃんを助けたいんだ！…助けてくれるんだったら、なんでもする！…おれが、おれが…死んだっていい！」

ユキオ「お、俺も！俺も何だつてする！ガムラ様！お願いだあ！ねえちゃんを…！」

アユム・ユキオ「本当だつ！本当に、姉ちゃんを助けてください！」

すると、真つ暗な空間に、先ほどの手より、もつとはつきりしたガムラの握り拳が表れ、勢いよくアユムたちへ！

ユキオ「あわわっ…」

アユム「……っ！！」

拳、ぶつかる！寸前！のところで、止まっている。

アユムの前髪の一本が、フツとまだ、なびいている。

ユキオ、口が「つつ！」の状態で固まっている。

だが、アユム、ユキオ、拳に対し、一歩も引かなかった。

…と、ガムラ、拳から一本、一差し指を伸ばし、その指先でルーイを触ろうと…。指先が近づくにつれ、だんだんとルーイの体の光が、強まる。そしてガムラの指先が、ルーイの額に接触。

と、まるでガムラに電撃が走ったかのよう  
うに！

ガムラ「うぐぐっ！」

ガムラ、とっさに指を引く。

しかし、ガムラの指、またすぐにルーイの額に、接触。

ルーイの光、だんだんと力強さが戻ってくる。乱れていた息も、安定してくる。しかし、それと同時に、今まで自然だったルーイの表情が、だんだんと険しく、固く、強ばっていき

アユム・ユキオ「がんばれ！ねえ……」

(言いかけで、止まる。時間が止まる演出？すいません)

以後、テレパシーでの会話、アユムとユキオには聞こえない。

ガムラの声「…ナニヲ…ノゾム?…」

ルーイの声「…マモル・コト…イキル・コト

…」

ガムラの声「…ナニカラ…マモル?…ナニヲ

…マモル?」

ルーイの声「…イキルコト…」

ガムラの声「ソレハ、ホントウナノカ?…ホ

ントウニ…マモル…ナノカ?…」

ルーイの声「…?…?…?…ワレワレコソ…ミナヲ

マモルモノ…」

ガムラ・ルーイ同時に

「ソレハ、ウソダ!…ミナガ、シンダ……ッ

?!……ホントウカ?…」

と、突然、高音域の音が、わーんと鳴り響く。

それでテレパシーでの会話、終了。

アユム・ユキオ「…ねえちゃん!」

高音域の音が、更に繰り返し、何度も、わーんと鳴り響く。

アユム、ユキオ、キョロキョロと辺りを見回す。

すると、空から明るい光。一本岩を浮かび上がらせるくらいの光量。

アユムとユキオ、星空を見上げる。

ユキオ「な、なんじゃ、あれ？きれいだあ！」

アユム「う、…うん！」

ユキオ、目をこすりこすり、再度、見直し…

ユキオ（大声）「げえ！…お、おい！あれ、

まさか、ゆ…ゆ…ゆーふお？そ、ホントに

UFO?…」

アユム「まさか、本当に…宇宙人…！」

アユム、ルーイを見る。

ルーイ、空を見つめながら

ルーイ「…ファ・ル・マ・ウ・ス・?…」

すると辺り一面、真っ赤になる。

連発する爆発音、燃えさかる山々、村人の悲鳴と怒号！

（UFOが山を攻撃している）

アユムとユキオ、突然始まったUFOの攻撃に、驚き。あまりの驚きに、身動き

ひとつできない。

アユム「…」

ユキオ「…：う、うそじゃろ？なんで？なんでじゃ？なんでUFOが山を襲つとるん？」

アユムの歯、ガチャガチャと、恐怖のあまり鳴ってしまふ。アユムとユキオ、泣きそうな顔。

ルーイ、その惨劇を見つめ、呆然となる。

（ここ、もう少し、状況説明の台詞が必

要か?)

するとアユム、ユキオ、ルーイにめがけて、光り輝くレーザーが襲ってくる。

アユム、ユキオ、ルーイ身構える。と、ガムラの巨大な手が、そのレーザーを受け止める。ガムラの手、レーザーに貫かれ、えぐれる。

アユム・ユキオ「ガムラッ！」

ガムラ、ゆっくりと立ち上がり、夜空に向かって咆吼!

するとガムラの全身の姿、鮮明に闇夜に表れる。

(ガムラは『カムイ伝の山丈』のイメージです。巨大です。なので、影絵で表現するのが良いかな?と思ってます)

ガムラ、UFOをつかんでは、握りつぶす。その繰り返し。

アユム、ユキオ、ガムラを懸命に応援する。

アユム「ガムラ！」

ユキオ「がんばれ!ガムラ！」

ルーイ、巨大なガムラを見つめ、苦しみ始める。

(ルーイのしゃべり方は、また船内と同じ感じに)

ルーイ「マサカ。ガムラモ、オナジ、ファルマウスノ、タミ、カ？」

アユムとユキオ、必死に歯を食いしばって、ガムラを応援する。二人を見たルーイ、ハツとして

ルーイ「ファ・ル・マ・ウ・ス…ファルマウス？…ワタシハ…ココハ…ナンド？ココハ、ドコダ？ワタシハ？ココハ？」

ルーイ、アユムとユキオ、見つめ

ルーイ「あゆ…む…ヤサシキ、コ……ゆき…

お…タノシキ、コ」

ルーイ、自分の掌を見つめ

ルーイ「トモニ、オサナキ、コ。トモニ、ヤサシキ、コ」

ルーイ、苦しみながらガムラを見つめ

ルーイ「…ナニガ…？ イッタイ…ナニガ…ココハ？」

ガムラがUFOを潰しても、更なる数のUFOがガムラを襲う。ガムラも奮戦する。

ガムラとルーイのテレパシー

ガムラ「コレコソガ、ファルマウス、ノ、マモリ、ダ。アラタナ、ホシヲ、ミツケレバ、マズハ、チカラデ、セイアツ、ス」

ルーイ「…ソレハ、オオイナル、マモリノ、タメ…」

ガムラ「イナ、ソレハ、ファルマウス、ノミ、ノ、チイサキ、マモリ。ホカノ、タミヲ、フミツケル、チイサキ、マモリ」

ルーイ「…」

ガムラ「コライカラ、ツツケタ、ファルマウスノ、オオキナル、ツミ」

ルーイ「ヤハリ、ガムラ、オマエモ、ファルマウスノ、タミ、ナノカ？」

ルーイ、アユム、ユキオ、闘うガムラを見つめる。

すると一本岩に降り注ぐ光、更に強まる。まるで昼間のよう。大きな、うねる轟音

が近づいてくる。  
アユム、ユキオ、ルーイ、その光を見つめる。

暗転

### ○ファルマウス船内

光り輝く船内。、無機質な服装の複数の人々。

A「コ、コノママデハ：ワレラノ、マモリガ、ヤブレマス！」

B「ワレラニ、アラガウ、アノ、キョジンハ、マサカ、ファルマウス、デハ？」

C「タシカニ。ナゼ、コノヨウナ、チイサキ、ホシウミニ：！」

D「ファルマウス、ナラバ：！」

D、小さなスイッチを取り出す。

A、B、C、無感情に笑顔。D、スイッチを押す。

すると高い金属音が鳴り響く。

ガムラの声「ギヤアアアア〜！！グツワアアアアア〜！！」

暗転

### ○一本岩の頂上（夜）

ガムラの苦しみの声、響き渡る。

ガムラの声「グツワアアアアア〜！！ギヤアアアア〜！！」

併せて、高い金属音も鳴り響く。

アユム・ユキオ「ガムラ！」  
ルーイ「マサカ！アレヲ！」

ガムラの動きが止まる。そして、うつすらと消えていく。

アユム「ガムラ！」

すると空から等身大のガムラ、ドサツと



その場に落ちてくる。

アユム、ユキオ、ルーイ、驚く。

アユム「え？ガムラ：様、なの？」

ガムラ、身動き出来ず、苦しむ。悶える。

アユム、ユキオ、ルーイ、ガムラを取り  
囲む。

ガムラ、ブルブルと震えながら、左手を  
伸ばす！天を掴もうとする仕草。

アユム、ガムラの、その手を、支えよう  
とすると、ガムラの手、ブン！と一払い、  
アユムを突き飛ばす！

ユキオ「え？」

ガムラの左手、さらにユキオの胸元を掴  
み、ねじ上げようと。金属音、さらに大  
きくなる。

ユキオ「え？え？！」

ユキオ、持ち上げられ、投げ飛ばされよ  
うと！

アユム「やめて！ガムラ！」

投げ飛ばす瞬間！ガムラの右手が、ガム  
ラの左手の手首を、ガツシと掴んでいる。  
ガムラ、苦しみながらも、右手に更に力  
を入れる。左手、だんだんと緩んできて、  
ユキオを放す。

ガムラ「グ・グ・グ・グ！」

ガムラの苦しみ、更に激しくなる。その  
場で苦しみ、もがく。七転八倒。

アユム、ガムラに近づく。

アユム「ガムラ様、ガムラ様！」

ガムラ、狂ったように苦しみながら暴れ  
る。ガムラの中で自制心と制御できぬ衝  
動との闘い。アユム達を襲おうとする衝  
動と、それを禁じる体。入り交じりガム  
ラの中で闘い。

アユム、ユキオ、ルーイ、ガムラの乱暴をさけながら、だんだんと一本岩の崖に、追い詰められる。

ルーイ、アユムとユキオを庇いながら、崖の上。

アユム（大声） 「ガムラ様、どうしたの！」

ユキオ（大声） 「ガムラ！」

ガムラ（大声） 「グガガガガッ！」

ガムラの拳が、アユム・ユキオを打つ！瞬間、ルーイが前へ。ガムラの拳、をルーイ、両手で受け止める。ガムラ、その手をブンと払う。そしてガムラ、両手でルーイの首を締め上げる。

アユム 「ガムラ様！」

ユキオ 「ガムラ！」

アユムとユキオ、ルーイの首を絞めるガムラの腕を必死に、振り払おうと。が、ガムラの右手がアユム・ユキオを払う。

しかし何度も何度も（ここ辺り、うまい演出を）立ち向かうアユム、ユキオ。

アユムとユキオ、必死にガムラに立ち向かうが、敵わず、それでもガムラに更に立ち向かいながら。

アユム（涙声） 「やめろおろく！ガムラあゝ！」

ユキオ（涙声） 「目を覚ませえ！ガムラあ！」

ユキオ、また吹き飛ばされる。

アユム 「あ！」

ガムラの右手が、次はアユムを弾こうとした瞬間。

ユキオ 「危ない！かがめ！かがめ！」

アユム、さっと身をかがませる。

アユム 「！そうだ！」

ユキオ 「あ！」

アユムとユキオ、大きく頷き、二人、『

かごめかごめ』を歌い出す。

かあーごめ、かごめ、

ガムラの体、ビクン！と大きく、しなる。

かごのなーかの、とりはー、いついつ、  
でやるー

ガムラ、苦しみが更に強まる。ガクガク、  
震え出す。

よあけのばんに、

ガムラの右手、ルーイを締め上げている  
左手を、力を込めて、へし折る。

ルーイの首筋から、ガムラの手が離れる。  
ルーイ、その場に倒れ込む。

アユム・ユキオ「お姉ちゃん！」

ガムラ、両手を天に突き上げながら、絶  
叫。が、ガムラの両手、またルーイに近  
づく。

ガムラとルーイのテレパシー

ガムラ「ダメダ！…スデニ、オノガ、カラダ

ハ、ワガ、イ、ヲカイサズ、マmanaラズ！

サイゴノ、トドメヲ！」

ルーイ「…ソレハ、ドウイウ、コトダ？」

ガムラ「ソナタノ、チカラデ、ワガ、イノチ  
ヲ、タツテクレ」

ルーイ「ソレハ…」

ガムラ「モハヤ、ドウスルコトモ、デキン。

コノチヲ、コノコラヲ、マモツテクレ！」

ルーイ「…デモ…」

ガムラ「サア！」

ルーイ「…イナ…」

ガムラ「サア！！」

ガムラ、じりじりとルーイに、にじり寄る。

ルーイ、後ずさり、しながらも、悲しい顔。ガムラを見つめ、必死に唄ってるアユム達を見つめ。

ガムラ咆吼！が！目には涙が…ガムラが泣いている！

アユムとユキオ、泣きながら、それでも声を枯らしながらも歌い続ける。

ルーイ、大きく、頷く。

つるとかめが、すーべった

アユムとユキオの歌声をかき消すように、金属音の音、更に大きくなる。

うしろのしょうめん、だあくれ！

ガムラ、悶えて、つい、崖から落ちてしまふ。

アユム・ユキオ・ルーイ「ガムラ！」

三人、ガムラが落ちた崖を、ワナワナとのぞき込む。すると

ガムラ、再度、巨大化する。ガムラの巨大な顔が、一本岩を見下ろす。

ガムラ、一本岩に（相撲の稽古でいう）テッポウを打ち始める。一本岩、地震のように揺れる。

アユム、ユキオ、ルーイ、必死にゆれを我慢しながら。

アユム・ユキオ、再度『かごめかごめ』を歌い始める。

ガムラの攻撃で、一本岩が揺れる、揺れる。だんだんと傾いていく。

金属音、更なる大音量。

ルーイ 「メザメテ、クレ、ガムラ。アノ、ヤサシキ、ガムラ、ニ、モドッテクレ！ヨミガエツテ、クレ。ガムラ！ナゼダ！ナゼ、コンナ、カナミシヲ、コノコ、ラニ…！」

ルーイ、初めて「かごめかごめ」を歌詞と共に唄う。

アユム、ユキオ、ルーイ「かあーごめ・かーごーめえー かあーごのなあーかの…とーりーはー！いーつーいーつー、でえーやーるー、よあけのばーんに、つーるとかーめが、すーべった、うしろのしようめん、だあーれ？」

ガムラ「ぐがあああ！！ぐがあああ！！ぐがががあああ！」

歌声「うしろのしようめん、だあーれ？」

…歌い終わる。その瞬間、一本岩の大地が光り輝く。足下の地面が強烈な光を発する！

アユム、ユキオ、ルーイ、光の中に消える。

### ○光の中

真っ白な光の中、アユム、ユキオ、ルーイ。

声「目覚めなさい。目覚めなさい。我が愛しき子ども達よ…いまこそ、全てを解き放ちなさい…！」

その声の主を探す、アユム、ユキオ、ルーイ。

その声の主は…光で構築された少女。りんとした美しさを持ち、光の衣をまと

い、輝く空間に漂っている。

アユム「お、おねえちゃん？」

その少女、ルーイと見間違うほどに、そっくり。

光の少女「…いいえ、私の名は…イチノ。

この地に生まれし、一人の人間。急ぎなさい。いまこそ、この船を、全てを、解き放つときです」

アユム・ユキオ、目をこすりこすり、まわりを見回す。と、光の中に、かすかに見える機械群。

ユキオ「なんじゃ？…ここ？」

アユム「分かんないっ！…けど、けど…：…これでガムラを…助けられるかも…？」

ユキオ「本当か！！それ…やったあっー！」

その後ろから、ルーイ、やさしく微笑みながら近づく。

アユムとユキオ、それに笑顔で答えよう

と…

ルーイ、その二人の笑顔をしつかりと見届ける！

と、同時に、ドンッ！とアユムとユキオを思いっきり突き飛ばす！

アユム、ユキオ『えっ！？』という表情とともに、光の中から消え去る。

### ○一本岩のふもと（夜）

どたん！つと、地面に転がるアユムとユキオ。

アユム「ここは？」

ユキオ「え？一本岩のふもと…え？え？岩が、光ってる？」

アユムとユキオ、一本岩を見上げる。

一本岩、輝きだし、だんだんと宇宙船の

形になっていく。

アユムとユキオ、その光景を、呆然と見守る。

アユム「一本岩は、宇宙船…だったの！しまった！お姉ちゃんは？あれ？」

ユキオ「え？まさか、あの中に？」

アユム「僕らだけ、残して！？」

一本岩の宇宙船、空に向かってゆっくりと上昇し出す。

アユムとユキオ、視線をだんだんと上げながら

アユム「なんで、なんで、なんでなんだよ！

なんで…そうやって…大切な物ばかり奪っていくんだよー！」

ユキオ「…ちくしよー！ちくしよー！ちくち

よー！ちくちよー！！」

ユキオ、地面に拳をぶつけながら…

一本岩宇宙船、UFOに突進していく。

それを巨大化したガムラが抑えようと。

一本岩宇宙船、ガムラに向かう。

イチノの声「大いなる昔、ファルマウスは強大な国でした。数多（あまた）の星々は侵略され、数多（あまた）の人々は殺されてゆきました。そう、ファルマウスの歴史は、侵略そのものだったのです。それは、ファルマウスにも、数多の星にも、大きな悲しみと憎しみを生みました。しかし、そんなファルマウスに、一人の男が立ち上がったのです。その名は…」

ルーイ・イチノの声「ガムラ！」

◇戦場で、一人の敵兵の死体を抱きかかえな

がら、天にほえる男、ガムラ。

イチノの声「ガムラはファルマウス人でありながら…いえ、ファルマウス人であったからこそ…反乱を起こしたのです。ファルマウスの地に真の平和あれ！と…。そして…ガムラの下に、多くの仲間が集まりました。しかし、あまりにもファルマウスは大きすぎました。仲間は次々と殺され…ガムラにも、その危険が迫ったとき…」

一本岩宇宙船、だんだんと人型になっていく。それはイチノ、ルーイ、とよく似た、姿。

ガムラと人型宇宙船（以後、イチノ・ルーイと記す）、巨人ふたり、相まみえる。ガムラがイチノ・ルーイに襲いかかろうと。イチノ・ルーイ、がっしと両手でガムラの手を握る。（力比べの形）すると、今まで苦しんでいたガムラ、だんだんと穏やかになってくる。

イチノの声「仲間たちはガムラだけでも助かることを望み、いやがるガムラを、ただ一人、この船にのせ、ファルマウスの地より旅立たせたのです。一途の希望を託して…いつの日か、ファルマウスの地に平和が訪れるよう…そのとき、必ずガムラがファルマウスの地に帰れるよう…」

◇出船を、にこやかな顔で見つめる多数のファルマウス人。

イチノの声「そうして、この船は…永遠の時



のねむりについたので。いつの日か、迎えに来たファルマウスの声で、蘇るために。ガムラではない…迎えに来た『ファルマウスの声』で蘇るために…」

ガムラ、落ちつく。とイチノ・ルーイとガムラを中心に、大きな光が輝く。

イチノの声「……この想い、幾千里の時の海を越えて…」

イチノ・ルーイ、ゆっくりとやさしく、ガムラをいたわるように抱きしめる。

すると…ガムラとイチノ・ルーイ、重なり合い、溶け合い…今、新たな一つの光となる。

### ○神代島上空（夜）

ファルマウスのUFO、その光に攻撃を。しかし、攻撃はことごとく吸い込まれ、光は、ガムラの形になる。

光のガムラ、両手を大きく広げると…UFO、その光の中に、吸い込まれていく。光のガムラ、大きく煌めき、今、まさに天にかけ昇ろうと…上昇を始める！闇夜の空を虹色に染め抜きながら…

光は、ガムラにもなり、イチノにもなり、ルーイにもなる。

### ○一本岩のふもと（夜）（今は一本岩はない）

その、登っていく光を見つめる、アユムとユキオ。

アユム「行っちゃうんだね？おねえちゃんも、  
ガムラも……」

ガムラ「そうだ……」

ユキオ「なんで、なんでいつちまうの？」

アユム「いかなくちや……ぜったいに行かなく  
ちや……ダメなの？」

ガムラ「そうだ……そこに、我々を待っている  
………待っている人々がいる……」

ユキオ「そんな……」

ルーイ「アリガトウ……オマエタチニ、アエテ、  
ヨカッタ。ホントニ、ヨカッタ。」

ユキオ「本当？」

ルーイ「アア……ハジメテ、ダッタ。ウマレ、  
イデテ、ハジメテ。コンナ、キモチ……コン  
ナ、ヤスラカナ、キモチ、ニ、ナツタノハ  
……」

アユム「たった一日……たった一日でも……」

ルーイ「アア。タッタ、イチニチ、デモ……」

ガムラ「……人には、短くても、一生、心に残  
る……そんな大切な日が、必ずある。」

ルーイ「……ソウダナ。」

アユム「それは、それは……僕たちも同じだよ  
！でも……でも！」

ルーイ「ホントニ、……アリガト。ワタシハ……  
イッタイ、イママデ、ナニヲ、マモツテ……  
キタノダロ？……ワタシハ……オオクノ、アヤ  
マチヲ、オカシテキタ、ヨウダ……」

アユム・ユキオ「そ、そんなんっ！」

ルーイ「……オマエタチニ、……ガムラニ、モツ  
ト、ハヤク……アツテイタラ、ナ……」

アユムとユキオの顔、涙でクシヤクシヤ。

ガムラ「泣くな……泣くな。愛しき子どもたち

よ。我々は必ず……必ず……。また、この地に……帰ってくる。」

アユムとユキオ、それでも泣いている。ガムラ「さあ、旅立ちの時だ！笑顔で、笑顔で見送っておくれ。今こそ、いこうぞ！我が故郷へ！あの銀河の海を越えて！そして、ともに築こうぞ！我らが美しきふるさと 平和なるファルウアスを！」

最後にルーイの光「……ホントニ……アリガト……」

……光は、一つとなって、天へと昇っていく……。

アユムとユキオ、それを笑顔で……くしゃくしゃの笑顔だが……笑顔で見送る。

光は、闇の空の彼方に、うつすらと軌跡を残しながら……消えていく。

と、同時に、東の方から、朝日が光をさす。そして一気に、空をあかね色に染め抜いていく。

その光景を、見つめる……アユムとユキオ。

そこへボロボロに泥だらけの、ムナカタ、やってくる。

ムナカタ「エライ目にあつたあ！君たち！大丈夫？怪我はない？無さそうだねえ……」

その時、どこからともなく、かごめかごめのメロディが、かすかに……それは洞窟だった場所、攻撃で無惨にも掘り返されて、ルーイが乗っていたUFOの残骸が、地中から顔を出し……そこから……まるでかごめかごめのメロディそのものの、メロディが鳴り響いている。

かごめ かごめ かごの中の鳥は、

いついつでやる 夜明けの晩に

つるとかめとすーべった

後ろの正面だーれ？

ナレーション「『かごめかごめ』とは、『籠の目』とともに『しゃがめ・かがめ』の『かごめ』から来ているという、二つの説がある。『夜明けの晩に』は、夜が明ける前の時分、明け方の寸前。『つるとかめとすーべった』は、元来『つるつるつうべった』であり、『はいる・落ち込む』で、『でやる』の対意語として『出たいが、つるつるとすべる』なかなか出れないから出してくれ』の意味となる」

N「よって解釈すれば、籠の中のガムラは、いついつ、ふるさとに帰ることが出来るのだろうか？それは、夜明けの晩に。しかし、なかなか簡単には、かなわないであろう。そのとき、船を解き放つのは、だあーれ？それは遠き日、今日の出来事を予見した市野が、ファルマウスのエマーゲンシーコールの音に合わせて歌ったものなのか？それとも…？それは、今となっては分からない」

かごめ かごめ 籠の中の鳥は…

アユム・ユキオ「…ぼくらは…ぼくらは、この夏の日の…このたった一日の出来事を…絶対に…忘れない…」

…うしろのしょうめん・だあーれ…

…うしろのしょうめん だあ

完

ーれえー……